

オプション教材ナルデ読解マラソン集

どっかいもんだい ちょうぶん どっかいもんだい ひと じ かん よ

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問で
 もいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文
 用紙に答えを書く必要はありません）

さくぶんようし こた か ばあい か かた じゅう
▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
さくぶんようし よはく か けっこう
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼^{さくぶんようし}作文用紙^{こた}に^か答え^{ばあい}を書く^か場合^{かた}（書き方は自由です。^{じゆう}
^{さくぶんようし}作文用紙^{よはく}の余白^かなどに書いても結構です）^{けつこう}
 ▼^{どっかい}読解マラソンのページ^{こた}から^{そうしん}答え^{ばあい}を送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

あ かき いろは
ひふ へろ ぬを
まめ まい ねん
やう りん ぎふ

日 月 火 水 木 金 土 日

問 問 問 問 問 問 問 問

8 7 6 5 4 3 2 1

答え

3 1 1 2 1 3 1 2

もんたい

作文教室		生徒のページ	
欠席連絡	自宅メール	検索の板	課題の岩
授業の道	作文の丘	読解マラソン	山のたよ
啼鳴の自習の仕方	啼鳴用紙	音声入りの方法	付箋讀書
イメージ記憶	国学生制度	問題集讀書申込	裏りノボ
作文の日コンクール	問題集讀書と四訂詩の手引	タイマー	

読解マラソンのページに行きます。

Online 作文小論文教室 言葉の森 案内 作文 読解 国語 質問 生徒

読解記事 読解教材 読解ノート

読解マラソン

読書好きにするには 語彙力の土台づくり

問題のページに行きます。

●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン広場(掲示板) ●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答チェック(管理用) ●アイテムチェック

国語力をつける 読解マラソン

0. 読解マラソンの仕方

マラソンの木(問題のページ) ●自宅メール

●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン成績(掲載) ●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答チェック(管理用) ●アイテムチェック

あなたは、 さんです。そうでない場合は、ログアウトしてください。

ログアウト

月と週の数字をクリックします。

innza→ 5.4

1

マラソンの木(問題のページ) ●自宅メール
●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン成績場(掲示板)
●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答チェック(管理用) ●アイテムチェック

コードとパスワードを入れてください。

コード: パスワード: (先生用:先生コード:)

コードとパスワードを入れて
送信します。

マラソンの木(問題のページ) ●自宅メール
 ●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン広場(場)
 ●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答者チェック(管理用) ●アイテムチェック

コード: パスワード: (先生コード: 先生パスワード:)

mrza-05-4 問題1:

問1 読解マラソン集5番「子どもというものは」を読んで次の問題に答えましょう。
 ○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 大人になっても、解釈され理解される姿にならない子供がいる。
 B 学校で、暗記や訓練が強制されると、かえってその結果のほとんどは忘れられる。

1 A O B O 2 A O B × 3 × B O 4 A × B O

解答1:

※ 解答の数字を入れたあと確認ボタン、決定ボタンを押します。

決定ボタンを押します。

「……この辺の様子が変わりませんので、なにかとお願いたします。家族は五人なんですの。中学生の娘と小学校、幼稚園の男の子がおりますので、おやかましいことがあるかもしれません……ゴミはお宅の横へ出させていただくうえ、ご迷惑でしょうが、どうぞよろしく……」

三十五、六だろうか。明るい笑顔で、しつとりした優しい言葉が、なんともさわやかであった。

その日一日、私は晴れ晴れしていた。若い奥さんから、こんな行き届いたご挨拶をきいたのは久しぶりだった。広い東京で、なにかのご縁があつて、お互い近くに住んでいるのに、チラと眼があつたりしても、間が悪そうに顔をそむけて、ほとんどのを言わない人が多く、下町育ちの私は最近なんとなく侘しい思いをしていたからである。挨拶は潤滑油である。（お早よう）（今晚は）とひと事をかけあうことが、お互いの気持ちのきしみをとかしてくれる。（お暑いですね）（お寒うございます）など、ゆきずりのなんということもない言葉が世知辛い毎日の暮らしの中では、やさしいわたりのように聞こえたりする。

「俺は口べただから……」

古くからの私の知り合いで、ひどくもの言わずの人がいる。働きもので正直で、親切だという人柄は、長いつきあいでよく知ってはいるのだが、そのムツツリした無愛想さに、つい、こちらのほうが気がつかう。機械相手の職業だから、なんとかやつていけるけれど、初対面の人たちからは、よく誤解されていた。

ある日、めずらしく重い口を開いて、五歳になった娘をどういうふうに育てたらいいだろうか、と相談にきた。四十近くになってやつとさずかったその女の子を、目に入れても痛くないほど可愛がつていた。

「そうね……とにかく他人さまにご挨拶が出来るように、今からしつけることね。小さいときからそういうふうにしこまないと、大人

になつて人前でものが言えなくなるのよ、照れくさくてね。心の中で何を思つていても口に出さなければ相手に伝わらないものね。子供は親のうしろ姿を見て育つ、というでしょ。挨拶も出来ない娘は人にすかないから、気をつけてあげないかね。」

彼はおどろいたように私から眼をそらし、顔を赤らめて考えこんでいたが、何かを納得したように帰つて行つた。

一カ月ほどして、その奥さんが見えた。

「……おかしいんですよ、うちの人つたら、このごろ朝おきると、私や娘にお早ようつて言うんですよ。このあいだの晩なんか、このおでん、うまいな……なんて、こっちはなんだか、調子が狂っちゃつて……でも嬉しくなっちゃいました。」

おとなしい、その奥さんはコロコロと喜んでいた。

（大事な娘が人に好かれなかったら……どうしよう）

あれからこの人は、一生懸命、努力しているらしい。

（沢村貞子「ご挨拶のすすめ」）



立て板に水のように、よどみなく挨拶をする人がいる。言葉もきれいだし、中身もソツがない。けれど——その中に心がこめられていなければ、相手はしらけてしまう。頭の良さをひけらかした、口先だけの世渡りはこちらの胸を打たないし、潤滑油にはならない。礼儀正しく、キチンと型にはまりすぎた挨拶も、ときとしていや味になることがある。

毎日、うちへ手伝いに来てくれる娘さんと私は、いつでも、どこでも、何をしていても声をかけあうことにしている。朝、彼女が仕事に着替えているとき、私がその前の廊下を通る。その足音でこの娘さんは、襦をちよつとあけて、「お早ようございます」

と首だけ出してニツコリする。これがお互いに（さあ、今日もこれから働きましょう）という合図になる。座ってお辞儀をすることもない。私たち庶民の暮らしは、とにかく忙しい。

少々のお行儀の悪さは堪忍してもらうことにしている。

私が、つきあう若い人たちは、それぞれに自分流の挨拶が、ピタリと身についていて、気持ちがいい。けれど、——年寄りの欲とでも言うのだろうか。私はもう一つだけ、この人たちに望んでいることがある。昨日の挨拶とでも言ったらいいのかしら。つまり、一つのことを終わらせるための挨拶である。

私は若い人たちの相談にのり、いつしよに悩み、あれこれ助言することが多い。ときにはその家族へ到来ものをわけたり、手料理の腕をふるって、もてなすこともある。その場ではもちろん、彼も彼女もとても素直に喜んでくれる。

だが……チラツと、心にすき間風が吹くのは、その後、この人たちに逢ったときである。

顔をつき合わせていても、まるで忘れたもののように何にも言わない人が多い。

たぶん、昨日のことは昨日のこととして、心の中から消えているのだろう。

「昨日のブドウ、おいしかった？」

などと、いくら親しい間柄でも、そんな思着せがましいことなど言えるわけではない。

「このあいだ、ご心配をかけたこと、おかげさまであれから先方どうまく話がつきました」

「昨日いただいたお菓子、母の好物だったので大よろこびしていました。ご馳走さまでした」

とか、たつたそれだけの言葉でお互いの心がふれあい、それが親しさを増し、人間関係を深めることになる、と、私は思う。

夫婦、親子の間でも、こうした日常の挨拶はあつたほうがいいし、それが暮らしの中のけじめにもなる、と思うのだけれど。

（沢村貞子「ご挨拶のすすめ」）



ぼくは、とりのこされたように一人、奥の座敷にすわっていた。おばあちゃんがお棺に入り、ふとんがかたづけられてしまっても、その部屋にはなんとなく、まだおばあちゃんの気配が残っているようで、ぼくは、せつなく、そしてちよつぴりこわいような気分だった。

カバンの中から、持ってきたマンガをだして読んでいても、あまり身が入らない。耳をすますと、表座敷のかすかなざわめきがきこえて、いよいよぼくだけが一人ぼっちだという気になってくる。

どれほどしたところだったろう。座敷の前の長い廊下を、ヒタヒタと歩いてくる小さな足音がきこえた。

昌一がきたのだらうと思って、ぼくはいそいで、座敷のふすまをひきあけた。

だが、そこにはだれもいないのだ。うす暗い電球が三つ天井からぶらさがる、長い廊下はシンとして、たまらなくさびしかった。

「なんだ、そら耳かあ。」

ぼくは、わざと大きな声でいって、乱暴にふすまをしめた。

そして、座敷の中をふりむいた瞬間、アツと息をのんだきり、うごけなくなってしまう。

いつのまにに入りこんだのか、小さな男の子が一人、ちよこんと仏壇の前にすわっていた。

ぼくは、頭の毛が逆立つような気がして、背中がゾクゾクと寒くなった。それでも、頭の中では必死に考えていた。

「裏庭から入ってきたのかな……。」

裏庭に向いた障子戸はあいかわらず半分開いたままだった。ちょうどそのとき、ものすごいような春の風が庭にあふれたかと思うと、桜の花びらが暗い闇の中で、グルグルと渦まくように踊るのが見えた。

小さな男の子は、あたりまえのような顔をして、座敷の中にすましてすわっている。たぶん、まだ小学校にもあがっていない、ぼくより五つ、六つも年下の子のようだった。

いがぐり頭の下の大きな目で、じつとぼくを見あげてだまつている。白い半そでの開襟シャツに、紺色のこわごわした半ズボンをは

いて、正座した膝の上に、両方の手をきちんとそろえているのだ。自分のほうがずっと年上だと気づいて、ぼくの気持ちはいくらかおちついてきた。きつと、だれかおとなについてお通夜にやつてきた子供が、たいくつになつて、歩きまわっているうちに、裏庭から座敷にあらりこんでしまったのだらう。迷子になつて、こまつているのかもしれない。

「坊や。お母さんは？」

ぼくはやつと、そうたずねた。

そのとたん、その子にやりとわらつた。おちつきはらつて、人をばかにしたような笑いだった。

「おい。」

その子がいっぱい。

「オレが、ついててやる。だから、心配はいらんで。」

「え？」

ぼくは、ぼかんとしてききかえた。こいつは、なにをいつてるんだらう。おばあちゃんをなくしたぼくをなぐさめるつもりなんだらうか。びっくりしているぼくに向かつて、その子はしゃべりつづけた。「おまえな、もうじき、ここに住むようになるぞ。でも、心配すな。オレがついとるから。」

みようにおとなびた口ぶりでそれだけいうと、その子は、もう一度大きく口をゆがめてわらつた。

「きようは、それだけいいにきたんや。」

そういつて、ツイと立ちあがつたその子が、ふすまをあけて廊下に出ていくのを、ぼくはあつけにとられてながめていた。ふすまは、ぼくの目の前でぴたりとどじられ、また廊下を、ヒタヒタと足音が遠ざかっていく。

(富安陽子「ぼっこ」)



はじかれたように、ぼくはふすまに手をかけた。一気にひきあけると、廊下にとびだした。

でも、やっぱりそこには、だれもないのだ。それなのに、だれもない廊下を、小さな足音だけが、ゆつくりと遠ざかっていく。

ぼくの体の中に、大きな恐怖がふくれあがつてきた。その恐怖が、悲鳴になって口からあふれでそうになったとき、表座敷に通じる廊下の角を曲がって、ひよいと、いとこの昌一が姿をあらわした。
「よお。しげちゃん。」

もし、昌一のそういう声をきかなかつたら、まちがいなくぼくは叫んでいただろう。だって、中学生の昌一の頭は坊主刈りで、おまけにその日昌一は、中学校の制服の白い開襟シャツと黒い学生ズボンをはいていたものだから、ぼくにはまるで、さつきの男の子が急に大きくなって、またそこにあらわれたような気がしたのだ。

「よお。」

立ちすくむぼくに向かってもう一度声をかけながら、昌一が近づいてきた。いつも無愛想な顔にせいっぱい愛想のいい、照れたような笑いを浮かべている。

「昌……ちゃん。」

ぼくは、かすれたような声で、いとこの名を呼んだ。

「い……今、だれかと、すれちがわなかった？ 小さい……坊主頭の男の子と……。」

昌一は、ぎよつとしたようにうしろをふりむき、それから、きよろきよろとあたりをみまわし、ちよつと肩をすくめてみせた。

「いいや。だれとも……。なんや？ それ。」

ぼくの全身に、どつと冷たい汗がふきだした。あの子は、この暗い廊下から、あとかたもなく消えうせてしまったのだ。

それが、ぼくがぼつこにであった最初だった。

ぼくは今でも、あの夜のことを思いだす。裏庭の闇の中で降るように花を散らしていた桜を。長い廊下の天井で、頼りなくゆれて

いた電灯を。ぼくと昌一の間を埋めていた、あのなつかしいおばあちゃんの家のにおいを……。

でも、そのときにはぼくはまだ、自分が本当にこの家で暮らすことになるなんて思ってもいなかった。いつかまた、ぼつこであう日があるとは考えもしなかった。

それなのに、あのぼんやりとした春の夜、ぼくのまわりではもう、新しいなにかがうごきだそうとしていたのだ。

（富安陽子「ぼつこ」）



本当にしかしこの三人組はそれから間断なくいろんなことをやってくれた。近所の養鶏所の病気や体の弱った鶏だけを入れておく囲いをあげ、二十数羽の鶏を道路へそっくり逃げ出させてしまった時は私が仕事で出張中で、妻と健二郎君の母親が必死になって鶏を回収して歩いたらしい。

この時は養鶏所の入り口の囲いを修理しているさなかだったので、まあこれは仕方ありませんよ、といかにも人のいい老経営者が言ってくれたので、それ以上の騒動にはならなかったという話だった。

イタズラは三人のうちの誰が首謀者ということでもなく、三人集まるとごくごく自然にそういう面白い「仕事」を発見してしまうようであった。

そうして彼らがまさおこしてくれた次の一件はサツマイモ騒動というものであった。(中略)

仕事をすませて帰ってくるともう夕方近くになっていた。私の妻はその日職場の保母の研修会があるとかで、夕食は私がつくる約束になっていた。私鉄駅の近くのマーケットで肉と野菜を買い、ビールが切れているのを出して缶ビールも半ダースほど買った。そうして急いで家に帰ってくると、どうしたわけなのか家の門の前に

さつま芋が山のように積まれていたのだ。その芋はいずれも土まみれでまさにそっくり全部いしましたが掘りおこしてきたばかりです、という状態であった。

「はて、これはどうしたのだらう？」と首をかしげているうちに、例の三人組が裏庭からどろんどろん飛び出してきた。みるとまたもや三人揃って泥だらけになっている。

「あのね、これね、今日みんなで取ってきたんだ」

と岳が私の前ですこしそりかえり、自慢げに言った。

「三人で力をあわせんだ」

と、健二郎君がすつかりとは舌の回らないキンキン声で言った。

「これを……どこから？」

そう言うってから、私の頭の中によくない予想がげしくするどく迫ってきた。そう思ったのと同時にクルリとふり返ると、私の予想がまさしく大命中である、ということがわかった。

すなわちわが家の前の芋畑が見事に掘り返されているのである。

「うひゃ」と私はうめき、その前で泥だらけの三人組はますます得意そうにそりかえった。

「ああ、おまえたち……」

と、私は言った。

それから大変であった。調べてみると掘り返されたのは三うねそっくりで、それだけでもかなりの分量である。

昇君がわけを話しに家に帰り、健二郎君の母親がまた私の家に戻ってきた。「ああ、こんなに……」と健二郎の母親は前かけを両手で握りしめいまにも泣きだしてしまいそうな顔をした。足の早い夕暮

があたりの薄闇を急速に深めていた。

「どうしましょう……」

と、健二郎の母親はひくい声で言い、私の顔を見つめながらいまにも本当に泣きだしそうにぎゅつと唇を引きしめていた。

「なんとかしましよう。大丈夫ですよ」

と、私は言った。しかしそうはいつでもあまり自信はなかった。あやまって先方の農家に引きとつてもらうか、あるいはこちらで掘りおこした分を買うかそのどちらかしか方法はないような気がした。

具合の悪いことに、その芋畑の主は、このへんでも有名なケチで頑固者という噂だった。そうして畑のなかに子供たちがたびたび入って荒す、と言って何度か私の家などに文句を言いにくいていたの

でもある。

(椎名誠「岳物語」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

私はそのまま健二郎君の母親と一緒に犯人の三人組を連れて農家の主人のところに詫言にいくことにした。健二郎君の母親はいったん家に戻ってエプロンをはずし、子供たちのジャンパーを持ち、自分は薄いオレンジのカーディガンを羽織って出てきた。心配で肩をすくすくすばめ、二人の息子の手をひいた若い母親のオレンジ色の背中が外灯の明りのなかでさびしかった。そしてそのときふいに私にはその小さな背中がまったくもって場違いながらもおそろしいほどなまめかしく見えてしまったのである。

その畑の主は、仕事のあとの早い風呂に入ったばかりで額や頬のあたりを気分よくほてらせていた。手拭いでごま塩の頭をこしこしとかきながら、

「そりやあなあ……」

と喉の奥でかすめるような太くてひくい声で言った。「そりやあなああんた、作物というものはこしらえているものにしかわからねえものですからね……」と、その老人はなんだか判じもののようなことをゆっくりとした口調で言った。

「本当に申しわけありませんでした……」

と健二郎君の母親は相手が言い切らないうちに深々と頭を下げ、それから嗚咽するように頭を下げたままつくつく肩のあたりをふるわせた。

それを見ながら私はすこしいらだつてきていた。いくら大変なイタズラだとしても、なにも自分たちの息子がその畑を二度と使えなくしてしまうようなとてもない大打撃を与えてしまったわけではないのだ。その気になるなら相手の言う値でそっくりこちらが芋を買い取つてしまえばそれはそれでとりあえず話は済むことではないか、何もそこまで、決定的に卑屈になり、ひれ伏すこともないじゃあないですか、と、その時私はよっぽど大きな声でそんなことを言つてしまおうかと思つたのである。

「まあしかし……」

と、農家の主は太くてひくいしわがれた声を出した。「まあしかしね、これでまあそちらさんのほうでもすこしはわかつてくれるん

ならいいんですよ……」と、そのごま塩頭は言った。そして結局掘りだした芋の半分を先方が引き取り、残りの芋を、私たちが買い取る、ということではまどまった。

空腹なのと寒いのと、それからどうも自分たちのしたことがあまりいいことでもなかったようだということがよくわかつてきたのか、帰りの道は珍しく三人とも神妙に黙りこみがちであった。

健二郎君の家の前にきたとき、私は思い切つて「この芋は全部うちで買いますからそちらは結構ですよ。ただしあれだけの量はちよつと食べきれませんのでお芋の方は半分ぐらいは食べてくれませんか」と言った。

「そんな……」

と、健二郎君の母親は娘のように眼を丸くして言った。

「いやいいんです」

「でも、そんなことはできません。やつぱりこれは……」

「いや本当にいいんです。とにかく今度のことはこちらの気の済むようにさせて下さい。それに今日はもう遅いから……子供たちもおなかへつてますし……」私は必死になつて私の提案を押し通した。母子家庭の、おそろくきつともう何年も続いているのだろうそのつましい生活に対してすこしでも力になれば、という氣負いが私の中にあった。

(椎名誠「岳物語」)



夜中、仕事をしていたら、背後から空を切る音がした。右耳をかすめて、小さな影が部屋の中を羽音をたててまわった。一瞬驚いた。蜂に見えた。シャツと乾いた音をたてて一周し、手元の机の角に下りてとまった。

蝉である。

東京の真ん中に近い、西麻布の小さなアパートに、しかも夜中の三時を過ぎて入って来た。

私の部屋には窓がひとつしかない。その窓を背に私は仕事をす。夏場は暑いので、夜風が吹く時分に窓を開けっ放しにして座る。窓のすぐ側に少し大振りの檜の木が伸びている。たぶん蝉はこの檜の木で昼間過ごしていたのだろう。

小さな虫は時々やってくる。しかし蝉は初めてである。

蝉はじっと動かないでいる。うるし塗りのように黒いつやのある頭部と、こぶのように盛り上がった胴部が、よろいのように勇ましい。羽は見事な曲線でふち取られ、すき通った羽膜に何本もの黒い細い線が、地図でよく見る河の支流のように流れている。なんと精巧にできているのか。

小さい頃何度も蝉を捕りに行っていたのに、その時はこんなことに気付かなかった。

今年の夏は、ほとんど外国に出かけていて、弟の命日に気付いたのはタヒチの島で、しかも夜だった。供養に何も送ることができず、帰れないとの電話も入れられなかった。ひどく情けなかった。

私の弟は十六歳の時に海で遭難して死んだ。私が二十歳の夏だった。弟が死んでからしばらくして、私の町で、弟は自殺だった、というわさが広がった。弟の性格を知っていた私は、世間はばかな話をするものだと思えなかった。

ところがある夜、私はお手伝いの小夜から、弟に関して思ってもみなかったことを聞いた。

それは弟が、小夜と二人で春先から何度も近くの川へ樽や筏を運んで、川下りの練習をしていた、という話だった。私は弟の意外な面を耳にしてとまどった。弟はどちらかというとおくびような性格であった。幼い頃、二人で道を歩いていて放し飼いの犬にでくわすと、そつと後ろから私の上着を引っ張るようなところがあった。

小夜の話と自殺のうわさが気になって、その夜、私は弟のことをいろいろと考えてみた。私は弟のことを他人よりよく知っている。と勝手に思い込んでいた。だが、それは兄としての私の思い過ごしで、弟の性格や、考えていたことは、本当はまるでわかっていなかったのではないか……。

私が最後に弟に会ったのは、彼が遭難した年の正月で、大学の野球部を退部した私に、父は大学をやめてすぐに家業を手伝うか、将来役立つ勉強をしろと命じた。それは文学部から他の学部へ転部しろということだった。私はそうしたくないと返答した。つかみ合いに近いもめ事になった。父に逆らうことなど我が家では考えられないことだった。私は飛び出すように家を出て、東京へ向かった。しばらくして、弟が家を継ぐという話し合いがついたと知った。

(伊集院静「夜半の蝉」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

初七日の終わった夜、私はふとんを抜け出し、母屋を出て離れにある弟の部屋に行った。電灯の紐をさがしていると高校生特有の、運動部の選手独特の汗のしみた匂いが漂った。

あかりをつけると、そこには受験勉強の最中だった弟の時間が停止したまま浮かび上がっていた。私は弟の机を掌で触れた。ひんやりとした木目の感触から、つい十数日前まで、ここで笑ったり、うたを歌ったり、悩んだりしていたらう若いゴツゴツした弟の気持ちのようなものが感じられた。

部屋を見回した。かつて私も使っていた本棚があった。『樽にのつて二万キロ』『コンチキ号漂流記』『冒険者×××』、そんな本が並んでいた。小夜の話は本当であった。

してはならないと思ったが、私は弟の引き出しを開けてみた。大学習ノートが一冊あった。それは弟が高校に入學してからの日誌で、毎日ではないが日々のこと、サッカーの練習、小遣いの出納も記している雑記帳のようなものだった。真面目な弟の性格がよくあらわれていた。

二月のある日、そのページだけが文字がいてねいに書いてあった。その日は弟の誕生日である。私が父と争って出ていった翌月だった。

要約すると、――兄が父と争って家にもどらないことになった。母に相談し父に命じられて、自分はこの家を継ぐことにした。医者になる。父は病院をたてると言った。だが自分はシユバイツァーのような医者になりたい。アフリカに行きたい。しかし親孝行が終わるまでがんばって、それからアフリカに行き冒険家になりたい。その時自分は四十歳だろうか、五十歳だろうか……。それでも自分はそれを実現するために、体を鍛えておくのだ。私は兄にずっとついてきた。兄が好きだ……。

弟はその冬、北海道大学の医学部志望を担任に提出したという。私は自分の身勝手さ、いいかげんさと思った。済まないと思う

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

た。長男である私のわがままが、弟を泣かせ、孤独にしていた。

あの夏の午後、川向こうの屋敷町に私は弟と二人で蝉を捕りに行った。私達の町と違ってそこは塀の上になで大きな木々が茂り、蝉は捕り放題にいる。たちまち弟の持つかごは蝉で一杯になった。

帰ろうとした時、屋敷町の子供達に囲まれた。蝉を置いて行けといわれた。四、五人の相手は身体も大きかった。弟は背後で私の上着を握りしめていた。私はだまっていた。すると背中中で急に弟が大声で泣き出した。子供達は笑った。そして弟の持つていたかごから蝉をわしづかみにして、何匹かを道に投げつけた……。

家に帰ってから、私は弟をなじった。二度とおまえをどこにも連れて行かない、と言った。そういわれても弟は私のそばを離れないで、しゃくりあげながら私を見ていた。そんな弟によけい腹が立った私は、弟をなぐりつけた。弟はあやまりながら私を見つめていた。

ふとした時に、あの夏の日の弟の目を思い出し、日誌の文字が浮かぶ。あの少年達に立ち向かうこともしなかったひきような自分と思う。あやまることのできない自分が生きている。

蝉は壁にじっとしている。窓を開けたまま、私は電灯を消した。どこか他人とは思えぬ一匹と、自分を情けないと思っている一人が暗闇の中にいる。もう秋がそこまで来ている。

(伊集院静「夜半の蝉」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

じつは地球にふんだんにある空気は、地球にもともとあったものではないのです。また雨や川や海という大量の水もありませんでした。これらがどうして地球にあるようになったのかは、しばらく前までは謎でした。

一つの説は、宇宙空間にあるガスが地球の引力に捕まって地球の空気になったというものでした。空気のような軽いものにも引力ははたらきます。薄いながら宇宙空間にガスはあるので、これはいちばんありそうな説でした。しかし宇宙空間のガスの成分を調べると地球の空気とはまったくちがうもので、これではいまの空気の説明はつきません。

宇宙空間からのものではなかったら、地球の空気はどこからきたのでしょうか。それは地球のなかから出てきたものにちがいないとみせ

火山が原因だという説もありました。いま現在地球のなかから出てきているガスとしては、火山からのガスがあります。火山からはガスも水蒸気も大量に出てきています。成分からいえば、火山ガスは空気と似ています。だから地球の空気も水もすべて火山から出てきたにちがいないという説があったのです。

しかし、この説には難点がありました。それはガスが出てきた時間の長さでした。もし火山から地球のすべての空気や水が出てきたとしたら、火山は何十億年もの長いあいだかかって少しずつ地球の空気と水をつくっていったはずなのです。なぜなら地球上で火山がある場所はどこかぎられていますし、火山の数もそれほど多くはありません。だから地球上のすべての空気と水が火山から出てくることは、あまりに大量すぎて短いあいだには不可能だったのです。

地球で見つかった約四十億年も前の岩を調べてみると、もともとあった岩が粉々に砕かれて海の底に積み重なって、さらにそれが熱や圧力で変化した変成岩という岩でした。四十億年以上も昔に海があつたのです。それゆえ少しずつ火山からガスや水が出てきたのでは説明がつかなくなってしまうのです。

火山が起源だという説はこうして消え、結局、地球が生まれてから二、三億年以内というごくはじめのころから大量のガスと水蒸気

とをもっていたにちがいないということになりました。しかしどのよう

に空気が生まれたのかは、まだはつきりわかっていないわけではあり

ません。地球がつくられていったときに星くずがはげしく衝突し

て、ガスや水蒸気をはきだしたり、地球がいったん溶けていた時代に

は、地球をつくった材料だった隕石（いんせき）のなかに少しづつふ

くまれていたガスや水蒸気はきだされたものだと考えられています。

このときにできたのが原始大気といわれるもので、そのころの地球

は厚い雲におおわれていたのです。原始大気には窒素や水蒸気はふく

まれていましたが、いまの空気とちがって酸素はほとんどなく、また

二酸化炭素がいまの何千倍もふくまれていました。まだ生物が住める

環境ではなかったのです。

やがて地球は少しずつ冷えていき、原始大気のなかにある水蒸気は

はげしい雨になって地表に降りそいで地球の上にはじめて海をつ

くったのです。そして原始大気の中の二酸化炭素は、海水中に大量に

溶けていくことによって減りつづけました。海水に溶けた二酸化炭素

は、やがて石灰岩などの岩石のなかに取りこまれて海水や大気のなか

からは減っていききました。中国の内陸に不思議な形をした岩が林立

している桂林というところがありますが、この岩も大昔につくられた

石灰岩です。その後雨の侵食を受けて溶けていって、いまの不思議

な姿になったのです。つまりここでは、岩のなかの二酸化炭素がふ

たたび水のなかに少しずつ戻ってきていることになりました。

ところで、いま地球にある空気のうち、酸素だけは地球のなかから

出てきたわけではありません。地球の激動期が終わって地球の表面の

温度が下がってからは地球に生命が生まれ、やがて進化して植物が生

まれました。これは三十数億年前のことです。その植物が太陽の光と

二酸化炭素から光合成で酸素をつくったのです。

（島村英紀「地球がわかる50話」）



古代の世界では、花をつけない裸子植物が繁茂（はんも）したといわれ、被子植物中心の世界になってきています。花をつけることによって動物とのかかわり合いができ、その種類の植物の繁栄（はんえい）があつたというとなえ方がされています。

なぜ、動物たちは花に集まるのでしょうか。いうまでもなく、花粉を運ぶためではありません。それは結果であつて、目的ではないのです。

動物たちが花に集まるのは、自分たちの生活のためです。昆虫は、自らのおなかを満たすために、蜜を吸い、花粉を食べに花に向かいます。また幼虫を育てるため、蜜や花粉を集めます。花に行ったら、たまたま体に花粉がついて、その体でまた別の花に飛び移ります。

結果的に、動物たちは花粉を運んであげる代わりに蜜と花粉を食べさせてもらい、花は花粉や蜜を提供する代わりに花粉を運んでもらっていることになりましたが、両者にギブアンドテイク、駆け引きの気持ちはもちろんありません。

AとBの植物があり、ある時、Aの中に蜜をわずかも作る植物ができたとしても、昆虫は蜜のあるAのほうへ寄り始めます。昆虫が来てくれれば、花粉を運んでもらえます。他の自分の仲間の花に花粉がつき、子孫も増えます。一方、蜜が作れないBには、昆虫はあまり集まりません。花粉が運ばれないと子孫はできません。やがてBはこの世からすたれ、蜜の出るAの植物が生き残ることになります。

このように、進化の過程で、動物とかわるための有利な条件を持つ植物が繁栄してきました。

では、動物たちがエサにする花の蜜や花粉には、どのような栄養があるのでしょうか。

花の蜜は糖分をたくさん含んでいます。糖分の主なものはショ糖

ですが、果糖やブドウ糖、少量のアミノ酸、有機酸も入っています。いずれも昆虫にとってはエネルギー源になります。

昆虫たちの目当ては蜜だけではありません。花粉も重要な食料なのです。花にとつては、花粉を食べられると、それだけ運んでもらえる花粉が少なくなるので不都合にも思えますが、食べられても大丈夫なくらい、花は多くの花粉を作っています。

花粉には、栄養がたくさん詰まっています。たんぱく質、炭水化物、脂肪、無機成分などの栄養素に富んでいます。炭水化物としてはでんぷん、ショ糖、ブドウ糖、果糖などを含んでいます。また、いろいろなアミノ酸も含まれています。

前にお話ししましたように花粉はいわゆる生殖細胞で、めしべに付着してから花粉管を自力で伸ばしていくのですから、それだけの栄養を蓄えているのもうなずけます。○・一ミリメートルにも満たない大きさの花粉が、十センチメートルにも達する花粉管を伸ばすことができるのですから、とてもない生力です。それを可能にする養分を持つている花粉は、それ自体栄養価の高い食糧ということができます。

カブトムシやコガネムシ、ハナムグリはよく花粉を食べます。ミツバチやマルハナバチは、花粉を蜜でだんご状に固めて、脚につけて巣に運びます。そして、幼虫に食べさせます。昆虫たちにとって、花粉は貴重なたんぱく源であり、主食なのです。

（武田幸作「アジサイはなぜ七色に変わるのか？」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

しかし、花がいくら甘い蜜をたくさん持つていても、昆虫に寄つてきて吸つてもらわないう限り、その魅力を伝えることはできません。まず花の存在を認識してもらふ必要があるのです。

それには、花の色や形、香りで、昆虫を引き寄せる必要があります。花にとつて外見は、昆虫や鳥を引き寄せるための最も重要な要素なのです。

「あばたもエクボ」ということは、動物にもあてはまり、彼らの植物の好みもさまざまです。だからこそ、これだけ多種多様の植物が生きているといえるでしょう。赤い花が好きで動物もいれば、黄色い花が好きで動物もいます。大きな花が好きで動物もいれば、小さな花が好きで動物もいます。

香りについても、人間がいい香りだと感じるものだけが好まれていくわけではありません。かぐわしい香り、臭い香り、その両方を好む動物がいるからこそ、多くの植物が生き残つていけるのです。

ガの仲間、夕方から夜間にかけて活動するので、夕方から咲く花に集まります。夜咲く花の場合、暗くて花の色はあまり役立たないので、その分、いい香りを発して昆虫を呼ぶという特徴があります。

香りは、気温が高いほど気化します。夜は昼に比べて気温が低くなるので、夕方から夜にかけて咲く花は、昼間に咲く花以上に強い香りをもつ必要があるのです。オオマツヨイグサ、ヨルガオ、カラスウリ、スイカズラなど、夜咲く花たちは、いずれも甘く強い香りを持っています。

また、夜咲く花の多くは、白や黄色っぽい色をしています。これは、薄明かりの中でも識別でき、夜目にもよく映るからです。昼間ならよく目立つ青色や赤色は夕闇にまぎれると、ぼんやりとして色が浮き上がってきません。実際、夜に咲く青色や赤色の花がないのは、こうしたデメリットがあつて、昆虫たちに注目されず、たと

えそういう花を咲かせる植物が現れたとしても、存命しえなかったのではないのでしょうか。

いい香りとは対照的に腐ったような匂い、いわゆる腐敗臭を漂わす花もありますが、そういう匂いを好んでくる昆虫もいます。

(中略)

人間の感じるいい香りだけが、昆虫を引き寄せるとは限らないのです。このことから花の香りは、それぞれ昆虫に花の存在を知らせる信号であつて、決してヒトのためではないことがわかります。

花の中には、ほとんど香りのしないものもありますが、こうした種類は、香り以外の色や形などの魅力で、動物たちを呼び寄せています。鳥は鮮やかな赤を好むといいましたが、鳥は匂いには鈍感で、鳥によつて花粉を運んでもらつていいる花は、ほとんど香りのないものが多いのです。

動物が花を選ぶ基準には、彼らの嗜好の他に、植物との相性もあげられます。

たとえば、ある花は、ある昆虫にしかうまく蜜が吸つてもらえないような作りをしています。その昆虫は、別の花へ行つても上手に蜜を吸うことができませんし、他の昆虫がその花の蜜を吸いに来て、蜜のところまで口が届かないようになっていきます。

このように、ある特定のもの同士、非常に密接なつながりを持つているケースは、その昆虫にとつても、花にとつても、互いだけが頼りになります。

植物は、花粉を仲間の花に送り届けるため、動物は花蜜や花粉を効率よく集めるため、植物と動物は、実に見事な関係を作り上げ、共存共栄してきたといえます。

(武田幸作「アジサイはなぜ七色に変わるのか?」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

いちばん運動会らしいのは、やはり、かけっこ。このごろは五十メートル競走、八十メートル競走と呼ばれる。六人が一組になつて走る。一着から三着までが、それぞれの旗のところへ並ぶ。こういうのは五十年前にわれわれもやったのと同じだからなつかしさもひとしおである。

来賓席はテントの中にある。かけっこのコースは反対側になるから、スタートからゴールまでが一望の中におさまる。ピストルがなると、小さな足が目もとまらぬ速さで前後する。目がチクチクする。どういう応援をしたらよいのかわからないから、手もちぶさたにながめているより手がない。

そのうちに、おもしろいことに気がついて、急に力を入れて見るようになる。というのは、スタートとゴールで、順位が大きく変わるといふことだ。

スタートで出おくれたこどもが、三、四十メートルのところから頭角をあらわし、六、七十メートルではトップに立ち、そのままゴールへ入る。そういう組がいくつもいくつも出てくる。はじめは偶然かと思つていたが、どうもそうではなさそうである。たいていの組で大なり小なりそういう傾向がみとめられる。スタートからずっとトップで通すというのは例外である。

途中で伸びてきた子がよい成績をあげる。もし、スタート地点から十メートルくらいのところで優秀をきめれば、ゴールでトップになる子はおそらくおくれた方に入つてしまふに違いない。早いところで、ゴールの順位を占うことがいかに危険であるか、これらのかけっこは、これでもか、これでもかと見せていた。こどもたちにはかけっこの教訓を汲みとることはできまいが、先生たるものは見逃す手はない。

傍におられる温厚な校長先生に

「かけっただけではなく、勉強にも、これと似たことがおこっているのではありませんか」と言つたら、校長先生も深く肯かれた。

こどもはどこで力を出すかわからない。スタートの近くで、ああだ、こうだと言つてみてもしかたがない。

小学校のかけっこはせいぜい百メートル競走である。それでも出

おくれた子が途中からぐんぐん出てくる。ゴールへトップで入つた子がいちばん早いのは、百メートルまでのことであるのも忘れてはならない。ゴールが二百メートルにのびれば、あるいは、ちがう子が出てきてトップに立つかも知らぬ。さらに四百メートル、千五百メートルならまた別のこどもが出てくる。

人生は七十年余り走りつづける超大マラソンである。学校教育はそのはじめのうちの二十年くらいにしかかかわらない。そこで、この生徒は優秀、とか、劣等だとかきめつけてしまふのは、百メートル競走なのに、スタートから三十メートルくらいのところの順位でものを言っていることになる。

その運動会のかけっこを見ていても、本当のレースは半分くらいを走つたところから始まるのがわかる。学校の先生は、この点について、用心の上にも用心をしたい。めいめいのペースというものがあつて、百メートルではビリでも五千メートルならトップに立つということはある。学校ではいっこうにパツとしなかつたのが、世の中へ出て、二十年、三十年すると、目ざましい快走を見せているという例はいくらでもある。

目先はいけない。重ねて言うが、教育は長い目を要する。

(外山滋比古「空気の教育」)



読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン集1番「ご近所へ引っ越して」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私が晴れ晴れとしたのは、その奥さんが明るい笑顔で声をかけてくれたからである
B 私が晴れ晴れとしたのは、その奥さんがしっかりした挨拶をしてくれたからである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「ご近所へ引っ越して」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ロが重いと初対面の人に誤解される。
B 「親のうしろ姿を見て育つ」とは、親を手本にして育つということである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「立て板に水のように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 挨拶が潤滑油になるためには、型を守ることが大切だ
B 若い人の挨拶は、行儀が悪いのが気になる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「立て板に水のように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 若い人が昨日の挨拶をすることを、私は望んでいる
B 昨日の挨拶は、家族の中ではなくてもよいが、他人に対しては必要だ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「ぼくは、とりのこされたように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ぼくは一人で奥の座敷にすわっていた
B 廊下を渡ってきたのは昌一だった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「ぼくは、とりのこされたように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A その男の子は、ぼくよりも少し年下の小学生ぐらいの子だった
B その男の子は、ぼくに、「心配するな」と言うために来たのだった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「はじかれたように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昌一が姿をあらわしたとき、ぼくがさげばなかったのは、昌一がにこにこしていたからである
B ぼくは、昌一とはいつも、無愛想な顔をして話している
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「はじかれたように」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昌一は、坊主頭の子の足音を聞いた
B ぼくは、それからまた、ぼっこにであうのだった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン集5番「本当にしかしこの三人組は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A イタズラは、三人があつまると、だれからともなく始められるようだった
B 私は、妻と、その日の夕食は自分が作ると約束していた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「本当にしかしこの三人組は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 三人は、申し訳なさそうな顔をして、掘ってきた芋を私に見せた
B 健二郎君の母は、芋の山を見てどうしたらいいかわからなかった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「私はそのまま」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私たちが謝りに行くと、畑の主は大声で怒り出した
B 私は、畑の主が怒るのも無理はないと思った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「私はそのまま」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 掘り出した芋の山のうち半分は、畑の主に戻すことになった
B 健二郎君の母は、私の提案に喜んで、目を丸くした
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「夜中、仕事をしていたら」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私は、弟の性格をよく知っていると思っていた
B 夏の夜風の吹く時分には窓を開けっ放しにしているので、蟬がときどき入ってきた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「夜中、仕事をしていたら」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 弟は、自分の臆病さを直すために近くの川で川下りの練習をしていた
B 私が父の命令に反抗するのを、弟は止めようとした
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「初七日の終わった夜」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「樽ののって二万キロ」などの冒険の本は、私が昔読んで置いていったものだった
B 誕生日の日誌で、ていねいに書いてあったところから、弟の決意が感じられる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「初七日の終わった夜」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「あの夏の午後、川向こうの屋敷町に」とある「あの夏」とは、私が父と争った年の夏である
B 私は、弟が泣き出さなければ、少年たちに立ち向かっていたと思う
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 12月4週分

問1 読解マラソン集9番「じつは地球に」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 宇宙空間にあるガスが地球の引力に捕まって、地球の空気となった。
B 地球上の空気の一部は、火山から短い間に作られたものである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「じつは地球に」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 原始大気の二酸化炭素は、海水に溶け、どんどん減っていった。
B 原始大気には、酸素の何千倍もの二酸化炭素がふくまれていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「古代の世界では」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 花粉を運ぶ動物たちと蜜を提 供する花との間にギブアンドテイクの気持ちはない。
B 動物とのかかわりにおいて有利な条 件を持たない植物は繁栄しにくい。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「古代の世界では」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昆虫たちが花粉を食べても、運んでもらえる花粉は少なくなならない。
B 花粉は、昆虫たちの主食である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「しかし、花が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 人間にとっては臭い香りを好む動物もいる。
B 薄明かりの中では、青色や赤色は目立たなくなる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「しかし、花が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 鳥は、かすかな香りのする鮮やかな色の花を好む。
B 動物が花を選ぶとき、色や香りの好みよりも、植物との相 性が優先される。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「いちばん運動会らしいのは」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A かけっこでは、スタートとゴールで、順位が大きく変わることがある。
B スタートからずっとトップで通す子供も少なくはない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「いちばん運動会らしいのは」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 勉強でも、スタートでトップになる子供がゴールでトップになることはない。
B かけっただけではなく、人生においても、本当のレースは半分くらい走ったところから始まる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

10～12月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パ ス： PDF	中2 コード： nane パ ス： PDF	中3 コード： nane パ ス： PDF
高1 コード： nane パス	高2 コード： nane パス	高3 コード： nane パス

ス：
[PDF](#)

ス：
[PDF](#)

ス：
[PDF](#)